

排卵障害を有する PCO 症例に対する凍結融解胚移植におけるレトロゾールの有効性についての検討

前田優磨¹、辻勲¹、岡村太郎¹、藤岡聡子¹、福田愛作¹、森本義晴²

医療法人三慧会 IVF 大阪クリニック¹、HORAC グランフロント大阪クリニック²

【目的】 レトロゾールは排卵誘発剤としても用いられているが、排卵周期凍結融解胚移植（FET）における子宮内膜の調整に対する有効性については明らかではない。本研究では、レトロゾールが排卵周期 FET の臨床成績に与える影響について検討した。

【対象と方法】 2020 年 1 月から 2021 年 3 月までの間に、当院において凍結融解単一胚盤胞移植を施行した 40 歳未満の排卵障害を有する PCO 患者 110 症例 158 周期を対象とした。子宮内膜の調整のために、レトロゾールにて排卵誘発を行った症例(レトロゾール群)と、ホルモン補充療法を行った症例(ホルモン補充群)の治療成績を後方視的に検討した。本研究は患者のインフォームド・コンセントを得て行った。

【結果】 レトロゾール群は 27 症例 35 周期、ホルモン補充群は 90 症例 123 周期であり患者背景に差はなかった。レトロゾール群とホルモン補充群の間において、胚移植時の子宮内膜厚はレトロゾール群で有意に低値となった($10.1 \pm 1.9\text{mm}$ vs $10.9 \pm 1.9\text{mm}$; $P < 0.05$)。一方、臨床妊娠率(34.3% vs 48.8%)および妊娠 10 週目までの流産率(8.3% vs 15.0%)に有意な差は認められなかった。

【考察】 排卵障害のため排卵周期 FET 実施困難な PCO 症例に対してレトロゾールを用いることで希望周期に実施可能となり、またその臨床成績もホルモン補充周期と同等であることが明らかとなった。レトロゾール排卵誘発による内膜調整法では準備周期が不要であること、およびエストロゲン製剤使用による血栓症発症のリスクを回避できるなどメリットがある。また PCO 症例にとって凍結融解胚移植法の選択が可能であると考えられる。また今後はレトロゾールの投与妊娠例の追跡調査にて安全性を検証して行きたい。